日本内科学会学術集会

内科学の展望（第9回）

—肝疾患について*

山梨医科大学内科

会長 鈴木 宏

REVIEW ON INTERNAL MEDICINE, 1981—LIVER DISEASES—

President of the Scientific Session: Hiroshi SUZUKI, MD

The Department of Internal Medicine, Yamanashi Medical University

肝疾患について 序説

日本内科学会会頭（第79回）

織田 敏次

REVIEW ON INTERNAL MEDICINE, 1981—LIVER DISEASES—

INTRODUCTORY REMARKS

Toshitugu ODA, MD

President of the Japanese Society of Internal Medicine (1981)

肝臓の臨床も大いに変わった。戦後の変革をたどってみると、まずは肝硬変の高蛋白食療法、それ以前はむしろ禁忌とされていた蛋白質である。これによつて肝硬変の予後に改善がみられたことも事実である。

次のエポックはGOT・GPT、黄疸のない肝炎、肝硬変の診断が可能になつたことである。したがつて、黄疸も腹水もない肝硬変の発見も容易になり、その予備軍にもなりかねない慢性肝炎が決して少なくない、そういった事実初めて驚かされるのである。

しかし、これとても、いわゆる原因指向の臨床

にはほど遠い。わたくし自身あるとき、肝炎・肝硬変の裏に潜むであろう、その原因をまさか忘れていたのではないでしょうね…、と念を押されて、一瞬たじろいだかつての経験を、いままた思い出している。

ようやくの思いで獲得したウイルスである。原因そのものである。原因さえみつければ、しめたもの。ワクチンもB型肝炎ウイルスに関する限りできあがつた。いよいよ、ウイルス撲滅のキャンペーンである。それにしても、大切なのは、一般の方々の協力体制である。実践への足固めである。

厚生省、文部省、科学技術庁の支援を得、さらに企業の関心、援助も十分とうけとめている。ウイルス肝炎研究財団も発足し、草の根わけての研

*本講演は1981年11月1日、甲府市丸の内1-9-11
山梨県民会館小ホールにて行なわれた。

究実践の体制づくりが必要なのである。ともあれ、現状を知つていただきたい、そうも願うのである。

この学術集会は、山梨医科大学の鈴木 宏教授にお願いして、肝疾患に関する、原因から臨床、そして治療に関する最新の情報、知見を披露していただくというのである。幸い日本内科学会演題選定委員会ならびに理事会の了承を得ることが

できて、実現の運びになった。

なお、この山梨の地は従来から、寄生虫による肝硬変の多発をみた土地柄でもあり、そういった事情にふさわしい症例検討の会も期待できようというものであり、準備委員長の加賀美年秀博士にも厚くお礼申しあげたい。

会員各位のご参考になれば幸甚である。